

裸足のリーダー

人生なんて、しょせん下書き！

～ 成功と失敗・・・こんな言葉に疲れた時に～

作：小林のりゆき

- 0. はじめに -

最初に言っておきますが、別に私は悟りを開いたわけでも何でもありません。

「人生なんて、しょせん下書き。」

そう言っただけなのは、そっちの方が楽しそうだから。
その程度のことなんです。

私はアナタと同じ様に、喜んだりもするし、苦しんだり悲しんだりもします。
怖いものは怖いし、調子に乗ったりもします。
で、直ぐに落ち込んだりもするし。

でも今のところ、それで充分。

だって、それがそのまんまの私。
私そのものなんです。
それ以上でも、それ以下でもありません。

以前メールマガジン「裸足のリーダー」で書いた二元論についてのお話が、思った以上に反響がありました。
そこで私は2005年2月に、メルマガ読者に向けて、そんな話をPDFにまとめ、プレゼントしたんです。

で、これからお話しするのは、そのWeb公開版。

頑張ろうとして、気がつかないうちに自分を追い込んでしまっている人。
行動しなくちゃと思っていて、それでも行動できない自分が嫌になっている人。
やろうやろうと頑張っているのに、心も行動もいつも空回りしてしまう人。

そんなあなたに向けて、ちょっと書いてみました。
二元論について。
そして、そんなものに縛られない気軽さを。

あなたが、この「人生なんて、しょせん下書き！」を読んで、少しでも心が軽くなってくれたとしたら・・・

そんな風に想いながら、書きました。
焦らずのんびりと、あなたのペースでご覧ください。

小林のりゆき

もくじ

はじめに	2
1. 二元論	5
2. 二元論の歪み	7
3. 清書なんて要らない	14
4. 人生なんて下書き	21
おわりに	30

- 1. 二元論 -

アナタが伝えたいことを、上手く相手に理解してもらうためには？

入り組んだ情報をわかりやすく。
難しいことを簡単に。

そんな風に、情報を簡略化して相手に伝えることが必要です。

わかりやすいモノは受け入れられ、わかりにくいものは受け入れられ辛いので
から。
情報を伝える側にとって、話の内容を簡略化していくのは大切なことなんです。

情報を簡略化して伝える場合によく用いられるものが、「二元論」です。

善か悪か、正しいか間違っているか、勝ちか負けか、愛か金か・・・
そんな風に、世の中の原理が2つしかないことを前提に論理が展開されること
を、二元論と言います。

現実社会では、この二元論が多用されています。
理由は大きく分けて2つ。

ひとつは“わかりやすい”から。
雑多に入り組んだ情報を、たった2つに分けて伝えることは、非常にスッキリ
します。

そしてもうひとつの理由は、“感情移入しやすくなる”からです。

どちらが勝つか負けるか？
結婚は愛で決めるべきかお金で決めるべきか？

そんな風に二元的に疑問を投げかけてやれば、議論は白熱します。
二元論は、情報を伝える場合に、相手の興味を惹きやすいんです。

二元論は単純明快に、必要な情報を伝えてくれます。

Aは悪人で、Bは善人。だからBの様になろう。
Aはダメだけど、Bは良い。だからBをしよう。
Aを取れば失敗するが、Bを取れば成功する。だからBをやろう。

端的でわかりやすく感情移入しやすい。
だからある意味、アナタにとってそれは、生きるための指針となる力を持っています。

「行動しなければ、失敗もないが成功もない。」

成功と失敗と言う二元化した世界を語ることによって、「行動する」ことの意義を、この言葉は教えてくれます。

時代劇ドラマでお馴染みの「水戸黄門」や、童話や昔話の世界なども、勧善懲悪型（100%善人と100%悪人しか登場しない）の二元論の世界です。
こういったわかりやすい設定は、道德観を養うのに大変便利です。

この様に二元論は、アナタの生き方に方向性や力を与えてくれる大切な役割を果たしてくれています。

でもね・・・

- 2. 二元論の歪み -

情報が氾濫する現代社会。
おまけにそんな情報は、スピードも難易度も相当高い。

現代は、情報そのものが厄介な代物となっているわけです。
これでは情報を取捨選択しようにも、大変です。

ですから、どうしてもわかりやすい情報に飛びつきやすくなります。
気がつかないうちにね。

そして、そんなわかりやすい情報の代表格が、二元論。

ところが、二元論は完璧ではありません。
多くの欠点を抱えています。

二元論が抱えている問題点を、ちょっと見ていきましょう。

■ 情報が捻じ曲がる

本来モノゴトの多くは、2つの要素だけで成り立っているわけではありません。
色々な要素が複雑に絡み合って、成立しています。
それが現実の社会です。

そんな世の中で物事を二元化してしまえば、流されている情報は明らかに捻じ曲がっていきます。

いくつもある事象をたった2つにしてしまうということ。
それは、省略と四捨五入の繰り返しです。

情報を二分化して伝えれば、いつかは事実とは違っていきます。
情報の受け手が、その情報をそのまま受け入れてしまえば、必ず事実とは違う
認識が生まれてしまうんです。

■ 思考の欠落

「成功」や「失敗」。
また、ここ数年よく耳にする「勝ち組」と「負け組み」。

これらは単なる結果論です。
分析に基づいた過去の事実や傾向を単に2つのカテゴリーに分けて説明している
に過ぎません。

もちろん、この様な過去の分析は、自分自身の参考や教訓にするべきものです。
けれどもそれは、あくまで“ヒント”であって、アナタが行なうべき“ルール”
ではありません。

各自が自分の状況や性格、方向性を考慮しながら、取り入れるべきところは取り
入れ、変更すべき点は手を加えていくものなんです。

ところが、何かと直ぐに“答え”ばかりを求めてしまいがちな現代社会。
情報の氾濫は、更にそれに拍車をかけます。
情報処理が煩雑となり、“自分で考える”という作業が抜けていくわけです。

何の考察もなく、その情報を“答え”として受け入れてしまいがちになるんで
す。

「Aの様になりたいのですか？嫌ですよ。なりたくなければBしなさい。」

二元論ではそんな風に、誰か他人の歴史がアナタの未来に当てはめられ、誰かの失敗が、まるでアナタの失敗であるかのように語られ続けます。

けれども、それは決して“答え”ではありません。

単なる“情報”なんです。

他人の成功も失敗も、即アナタの成功や失敗に結びつくわけじゃありません。

しかし、現代社会はアナタから、その情報を“考察する”という余裕を奪っていきます。

そして、いつの間にか単なる“ヒント”が、アナタの“答え”となり、アナタの“ルール”に摩り替わっていく。

言われるがままにそうしなければ、自分が間違いなのではないかという気持ちにさせられてしまうんです。

特に二元論は感情移入しやすい。

ですから、そんな情報を“考察する”ことなく、そのまま受け入れてしまします。

そうやって気がつかないうちに、アナタの行動規範はアナタ以外の“何か”によって決められていくことになります。

■ 用意された答え

二元論の場合、2つのうち一方が、情報発信者の意図する「答え」として伝えられることになります。

例えば、Aさんがアナタに、夜型人間から朝型人間になってもらいたいと思ったとします。

Aさんはきっと

「早起きをするとね・・・」

と言って、早起きすることの利点と早起きをしないことの欠点をAさんに説明するでしょう。

つまり、

早起きする事 = 正解

早起きしない事 = 間違い

これを前提として、Aさんは話を展開させていくわけです。

確かに一般的な見解や要因として、早起きは正解です。

けれども、どうしても早起きをしなければならない、なんてことはありません。

早起きをしなくとも、充実した生活は送れます。

そんな方法は、いくらでもあるはずですよ。

ひょっとするとあなたは、夜型のほうが向いているのかもしれない。

なのに早起きが「正解」となるのは、Aさんがあなたに早起きしてもらおうと思っているから。

つまり、これはAさんが用意した“答え”なんです。

決して、あなたの“答え”なんかじゃありません。

情報発信者が用意した“答え”が、必ずしもあなたにとっての正解とは限りません。

そういうことです。

■ 大勢による偏り

ところが、どうしても世間では、片方の“答え”ばかりが、目に付いてしまいます。

早起きを勧める情報は沢山あっても、早起きをしなくとも快適に生活できる情報はなかなか見つかりません。

成功した人の朝型人間ぶりは色々と採り上げられても、成功した人の夜型人間ぶりは、エピソードとしてあまり語られません。

どうしてでしょ？

少なくともこの日本は、資本主義の原理で動いています。

需要のあるほう需要のあるほうへと物事は流れていき、ひとつの大きな流れが出来上がります。

もちろん、そんな川の流れの行き着く先は“ひとつ”なんです。

そこには、たったひとつの価値観だけが待ち構えています。

そんな川に、情報が大量に流されていきます。

だから、偏った情報ばかりがアナタの目の前を通過しているんです。

そしてそんな流れに、みんな飲み込まれてしまう・・・

アナタが受け取っている情報は、常に均一とは限りません。

偏っている可能性が非常に大きいんですね。

けれども、気づかずにそうやって情報を受け取り続けるアナタの見解は、いつの間にかそちらの方に流されていくわけです。

二元論とは、情報発信者が情報を伝えるための1つの道具です。

また、情報を受け取る側にとっても二元論は、情報を理解するための1つの道具に過ぎません。

けれども、情報が氾濫しているこの時代では、道具を道具として扱える余裕なんて、なくなりつつあります。

いつの間にかあなたは、当たり前のように二者択一を迫られる事になっていきます。

Aなのか、それともBなのか？

たった2つの選択肢だけを与えられます。
でも実は「こちらが正解ですよ。」なんて、暗に答えは用意されているんです。

言ってしまうえばこんな状況は、知らないうちに答えを強要されているようなものです。
息苦しいはずですよ。

情報が今ほど多くなく、世の中がシンプルだった時代には、そんな二元論だって良かったんです。

圧迫感ではなく、単純な生きる指針だったんです。
生きる指針、行動の指針として、非常に受け入れやすかった。

市場も希望も、拡大していた時代ですから。
世の中そのものが成長していたんです。

でも、今の時代は違います。

市場だって、希望の入り込む余地だって、昔の様に拡大はしていきません。
現状の大きさのままです。
もしくは小さくなっている・・・

そんな時代に、逆に世の中のシステムは複雑に入り組み、情報は溢れかえっています。
そして欠点の非常に多い二元論までもが、アナタに向かって当然であるかの様に語られます。

そんな情報が、目の前を飛び交っています。
まるで、何かにたかるハエのように。

だから、一見自由に見える世の中が、息苦しく感じられてくるんです。

二元論は、知らないうちにアナタを縛っていきます。
そしてそんな二元論によって、アナタは振り回されていくんです。

そのことにアナタ自身が気づかなければ、アナタは自分で自分をどんどんと追い込んでいってしまいます。

- 3. 清書なんていない -

二元論によって、成功を語る時、

「行動しなければ、失敗もないが成功もない。」
「失敗を恐れるな。失敗しないことの方が、大失敗なんだ。」

なんてことが、よく言われます。

でも、これらの言葉には、ある種の前提があります。

“最後には成功している”

そんな前提があるからこそ、それらの言葉が語られるわけです。

でもその前提って、おかしい。
前提条件付き、ってことがそもそも変ですが、さらにその前提の設定自体がおかしいんです。

ほとんどの人間は、成功せずに終わります。
成功した人だって、最後まで成功の座についているとは限りません。

失敗から這い上がった人は、ほんの一握りにしか過ぎませんし、そんな人ですら次の失敗で這い上げられる保障はどこにもないんです。

にもかかわらず、いつだって二元論では、最終的には成功していることが前提となっていて、話を展開させていきます。

では、そんな前提が崩れてしまったら？
前提が、仮に“最後は失敗で終わる”だったとしたら？

「行動しなければ成功はしないが、失敗して路頭に迷い、犯罪者になることもない。」

「あなたは、不幸のどん底のまま、軽蔑されて死んで生きたいのですか？いやなら、なぜそんなことをするんですか？」

そんな風に、話の理屈が変わってしまいます。
で、それが二元論の現実であり、限界です。

話の前提が変われば、そんな話は全く無意味なんです。
ある特定の前提があった上での、お話なんです。

人間は失敗を恐れます。
そしてそれは、決して悪いことではありません。

失敗するより失敗しない方が良い。
そう感じるのは、当然のことです。
危険や失敗を避けようとするのは、人間の本能として当たり前のことなんです。

あなたにとって大切なモノ、大切な人。
それを失ってまで手に入れたいものなど、一体どれくらいあるのでしょうか？

失敗することよりも、失敗しないことの方が大失敗であるケースなんて、現実にはそう多くはありません。
そんな失敗、そもそも「失敗」などと言うほどのものではないんです。

「成功」と「失敗」。

そんなたった2つの世界だけを語るから、何かと大げさになってくるんです。

欠陥だらけの二元論をどんなに駆使したところで、失敗そのものの恐怖は消え去りません。

どんなに二元論で訴えられても、どこかに疑問や不安が残るわけです。

だから、二元論で「行動すべき」と言われたからといっても、なかなか行動できない。

逆に二元論によって感情を煽られている分だけ、失敗に対して知らず知らずのうちに足がすくんでしまいます。

何かにつけて二元論は、「成功」だの「失敗」だのと大袈裟な話ばかりを繰り返しますから。

にもかかわらず、二元論はアナタの背中を押そうとするんです。

だから余計に、行動が出来なくなってしまう。

「成功」と「失敗」という言葉の狭間に身を囚われて、動けなくなってしまう。

そうやってこの世の中は、知らず知らずのうちに息苦しくなっていくんです。

そもそも、二元論を語る人が言うところの

「成功」

そんなものをアナタが手にする必要がある、一体どこにあるのか？

別にそんな成功、手に入れなくたって良いじゃないですか。
それが、アナタにとって必要なことだとは限りません。
単に情報発信者が、そう言っているだけの話です。

誰かの成功は誰かの成功であって、決してアナタの成功ではありません。

「成功」のあり方なんて、人それぞれ。
「失敗」だって、それを失敗と感ずるかどうかも、またその感ず方だって、人それぞれなんです。

そして、「成功」の反対は決して「失敗」なんかじゃない。
失敗しないことが成功ではないのであれば、成功しないことも失敗ではありません。

繰り返しますが、世の中なんてのは多元的なものなんです。
世の中は、成功と失敗の2つだけで成り立っているわけではありません。

そんなたった2つの世界のどちらかを選択しなければならない理由なんて、どこにもありません。
成功しなくたって、失敗しない方法はいくらだってあるんです。

成功も失敗もない人生が退屈だなんて、一体誰が決めたんでしょう。
恐らくそれは、アナタ以外の誰かです。

成功せずとも幸せに暮らせる方法なんて、探せばいくらでもあるはずですよ。
成功とは言えなくとも、ささやかな暮らしを手に入れ、それだけで満足な生き方だって素晴らしいはずなんです。

アナタには、アナタにしか行けない道がある。
それが他人にとっては失敗でも、アナタにとっては幸せの道なのかもしれません。

そして、それがアナタにとっての本当の成功。
他人の物差しでアナタの人生を計る必要なんて、どこにもありません。

常に二者択一を迫られ、さらには「こっちが正しい」なんて風に、アナタは暗に言われ続けています。

おまけに

「出来ないのは、行動しないからだ。」

なんて具合に、成功できない理由まで語られます。

けれどもそれは、いつだって

「清書しろっ！」

と言われ続けている様なものなんです。

清書は、きちんと書けなければ失敗です。
成功と失敗しかありません。
そんな二元的な状況下に置かれます。

だから清書は、身も心も改まって書くことになります。
そして、なかなか書き出せない。

「失敗しないように。」

そんな覚悟や思い切りの様な「勇気」が必要になるんです。

だから、書き出せない。
だから、行動できないんです。

何かにつけて、大袈裟なんです。
成功だとか失敗だとか。

二元論とは、「失敗を恐れるな」と言いつつ、実は成功と失敗の狭間の崖っぷちに立たせて、背中を押しているようなものなんです。

行動そのものに、勇気なんて必要ありません。

当たり前じゃないですか。
人はやりたいからやるんです。
やりたくないものは、やりたくないんです。

「宿題やりなさい！」と言われても全くしない子供だって、待ちに待ったゲームやマンガの発売日には、即日買いに行きます。
止めたって買いに行きます。

楽しみにしていたゲームやマンガを買ってきて

「来月からやろう。」
「来週の月曜日からやろう。」
「後からやる。」

なんて人は、どこにもいません。
家に帰ったら即、行動です。

そして、そんなものに「勇気」なんてこれっぽっちも必要ないんです。

人はやりたいことはやって、やりたくないことはやりたがらない。
それだけです。

「成功」だとか「失敗」だとか、そして成功できない理由が「行動」だとか、「勇気」が必要だとか。

そんな大げさなことばかり言い出すから、逆に何も出来なくなるんです。
たわいもない事だって、なかなかやり出せなくなるんです。

そんな言葉なんて聞く必要は、これっぽっちもない。
清書なんて、いらない。

- 4. 人生なんて、しょせん落書き -

宝くじを買いに行かなければ、宝くじを当てることは出来ません。
でも、買おうとも思わずにその辺をブラブラしていたら、大金を拾うかもしれ
ません。

外に出かければ事故にあう可能性はありますが、家でテレビを見ていたからと
いって安全だとは言いきれません。

つまり“結果”とは、あなたが行動する・しないに関係なく手に入るものなん
です。

もちろん“結果”とは、成功と失敗のどちらか一方しかないわけではありませ
ん。
無数の“結果”があるわけです。

そしてあなたは、行動をするしないにかかわらず、何らかの“結果”を手に入
れることになります。

なぜ？どうして？

それはあなたの行動に関係なく、世の中は動いているから。

あなたが行動するしないに関係なく、時は流れ、世の中は変わっていきます。
そんな流れの中で、あなたは“結果”を及ぼす何らかの「因子」に出会ってい
るわけです。

無数の「因子」の流れの中に、あなたはいる。

そう言って良いかもしれません。

そしてその「因子」は、アナタと出会う瞬間までが“可能性”であり、出会った後が“結果”になるんです。

ただし、その「因子」ひとつひとつには、アナタが認識できるほど大きな意味はありません。

いくつもの「因子」が積み重なって、ようやくアナタ自身で認識できるんです。

だから、“結果”とは1つの因子のことではなく、その因子に出会った“積み重ね”だと言ったほうが良いのかもしれない。

ごく稀に訪れる、大きな意味を持つ因子（可能性）。
それは、「チャンス」などという言葉で呼ばれます。

繰り返し言いますが、アナタの意思や行動とは関係なく、結果は必ず訪れます。

でも、行動することと、しないこと。
それには、決定的な違いがあるんです。

それは、

“その可能性を自分の意思で掴むのかどうか？”

ということです。

「行動する」というのは、自分の意思でその可能性を掴むということです。

「行動する」ことで、あなたは無数に散らばる“可能性”を自分で選択して手に入れるわけです。

行動しなければ、どんな可能性にぶち当たるかは、選択できません。時の流れに任せて、何らかの可能性にぶつかるだけです。

もちろん、1つの行動で1つの結果を掴むわけではありません。1つの行動とは、無数にある可能性の中から、たった1つの可能性を選択した行為にしか過ぎないんですから。

小さな行動ひとつひとつの積み重ねの答えが、“結果”となっていきます。可能性を手にする分だけ、結果に近づいていくわけです。

行動することは、その可能性を次から次へと選択していくこと。行動しないということは、どんな可能性を手にするか分からないということ。

ここには、大きな違いがあります。

早い段階からその結果に向けて可能性を選択し続けていけば、望む結果に近づくことが出来ます。

けれども、成り行きに任せているだけでは、望む結果から遠く離れてしまうかもしれません。

自然に任せて多くの可能性を手にしてしまえば、イヤな結果が目の前に来てから慌てることになります。

そして、避けることは非常に困難です。

1つの可能性を選択し、それによって次の可能性を自分で選択する。それは、あなたが望む“結果”に向けて、臨機応変に対応しているということです。

自分の意思で可能性を選択した数だけ、あなたは結果を修正していくことが出来るんです。

早いうちから、その可能性ひとつひとつを自ら選択していけば、十分に自分でその結果をコントロールしていくことが可能です。

行動することで、あなたは「失敗」という結果を避け、望む結果に近づくことが出来るわけです。

成功と失敗の2つだけで結果を考えること。
それは、1つの行動で1つの結果を得ようとする事です。

そしてそれは、選択肢がたった2つの世界です。
あなたの思考と行動は、非常に限られてしまいます。

成功するために、行動しなければなりません。
そして、行動することで成功を掴まなければならなくなります。

そんな時、人は大きな一歩を踏み出すしかありません。
大きな一歩を踏み出す、そんな勇気が必要になってくるんです。

けれども既にお話したように、1つの行動は無数の中から小さな可能性を選択しているだけにしか過ぎません。

小さな可能性を自ら選択すること。
それは、小さな小さな一歩なんです。

そこには、勇気なんて必要ありません。

だって、成功とか失敗とかは関係ないんですから。

大きな一歩と違って、そんな小さな一歩は、次の一歩でどちらの方向にだって進むことができます。

踏み出せば踏み出すほど、あなたは自由になっていきます。

小さな一歩で良いんです。

早め早めに、小さく小さく踏み出せば、大きな一歩なんて必要ありません。

あなたが行動できないのは、大きな一歩を踏み出そうとしていたから。

あなたが空回りしてしまうのは、大きな一歩前進を気にしていたから。

大きな一歩を踏み出さなければならなかったのは、成功と失敗という2つの結果だけが気になっていたからです。

そんな言葉の狭間で何も出来なくなっていたからです。

本当の行動とは、小さな小さな一歩のことなんです。

私は人生なんて、その日常のほとんどが

「下書きみたいなもの」

そんな風に思ってます。

清書しなければならぬ様な時なんて、滅多にありません。

雑に書こうが、粋からはみ出そうが、他人には解読不能な汚い字や絵であろう

が・・・

何度だって書き直そうが・・・

何だって構わない。

自分自身にも他人にも迷惑なんてかかりません。

何回だって消して、また書き直せば良いだけです。

消さずに上からなぞったって、構いません。

それが、下書きってものです。

それが、「行動」ってものです。

もちろん、人生やり直しは何度だってききますが、必ず元の条件に戻れる事は
ありません。

確かにそうです。

消しゴムでその下書きを消したところで、必ず「跡」は残ります。

でも、どんな跡だって、それはアナタにとっての道標（みちしるべ）になるん
です。

滅多にこない清書の時間。

そんな時は、上手くいった「跡」をなぞって書けば良いんです。

で、上手くいかなかった「跡」は、避けて通れば良い。

それだけなんです。

アナタにとって大切な時には、そんな下書きが役に立ちます。

絵を描くとき、文章を書くとき、習字をするとき・・・

そんな時、いつだってその清書の道標は「下書き」なんです。

人生だって同じ。

いつだって人の道標は下書きなんです。

早め早めに行動していくことで、あなたは自分自身の可能性を先取りしていく事になります。

自由になっていくんです。

可能性を自ら選択し、選択を重ねることで、あなたはこれから訪れるかもしれないリスクを最小限にしていくことができます。

そして、自らが意図する“結果”に近づいていくんです。

あなたが行動することで得たものは、決して清書なんかじゃありません。

行動することで得たもの、それは下書きです。

そして、その下書きがあなたにとって、大切な道標となるんです。

素晴らしいことじゃないですか。

行動が出来ない？

違います。

それは、いつだって誰かに「清書しなさい。」って言われ続けてきたから。

行動しても空回りしてしまう？

問題はありません。

だって、下書きなんだから。

失敗なんて、そうそうあるもんじゃありません。

きっとあなたが失敗だって勘違いしているのは、単にあなた自身の見栄とプラ

イド。

そんなもの、他人からしてみれば、どうだって良いんです。

アナタが見栄を張らなければ、それでお終いです。

どうってこと、ありません。

アナタが書いた下書きを見て、笑う人たち・・・

そんな連中、どうだって良いじゃないですか。

だって、アナタが本当に困った時に、そんな連中が手を差し伸べてくれるんですか？

きっと、また嘲笑ってそれでお終いですよ。

アナタの力になんて、これっぽっちもなりやしない。

いてもいなくても、関係ない人たちなんです。

せいぜい、いたら邪魔になる程度。

その程度です。

上手く行かなくたって、いいじゃないですか。

途中で諦めたって、いいじゃないですか。

そのほとんどが、下書きなんですから。

正解をいつも見つけなければならぬ理由なんて、どこにもありません。

だって、人生は下書きみたいなもんですから。

人生において、ごく稀に訪れる「清書」の時間。

そんな時のために、あなたは今、下書きをしています。

何度だって書きまくるんです。
書いて書いて書きまくるんです。

愉快的な位にね。

これからの生活の中で、もし二元論に挟まれて苦しくなったら、自分自身に向
かって言ってあげてください

「人生なんて、しょせん下書き。」
「行動なんて、しょせん下書き。」

- 5. おわりに -

まるで私は二元論を、「悪者」かのように扱っているように感じるかもしれませんが、決してそうではありません。

昔と今は違う。
それだけでは、今の時代にはちょっと不適合。
そんな感じです。

きっと私達は、二元論から切り離して生活は出来ないはずで。

人は自分の想いを伝えるために、情報を簡略化するんですから。
そして情報を受け取る時だって、その情報を簡略化するんですから。

ただ、今の時代、それだけだと息苦しくなる。

だから、決して二元論から切り離して生きる事は出来なくとも、少しだけ心と身体をそんなものから解放してあげる。
それ位のお話なんです。

物事を捉える視点は、いくつもあった方が楽しいじゃないですか。

このお話が、アナタにとって素敵なプレゼントになりますように。

2005年5月25日 自宅にて
著者 小林のりゆきより

もちろん、言わなくともわかっているとは思いますが、

本文書の著作権は、作者である小林のりゆきにあります。

このPDFファイルは、小林のりゆきが管理・運営するWebサイト「ビジネス・ライフ新生計画」に公開された「人生なんて、しょせん落書き」と同一の内容です。

パソコン用のモニターにて閲覧するのが疲れる・見づらいという方のために用意しました。

そのため、印刷に関しては、このPDFファイルを個人的に読むための目的のみにおいて、許可します。

それ以外の目的において、許可なく複製・改編し配布すること、また本文書の一部あるいは前文の転用を禁じます。